

國學院大學學術情報リポジトリ

雪月花の時、最も君を懐ふ：

『万葉集』における交友と風光の美的理念

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 道代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001593

雪月花の時、最も君を懐ふ

—『万葉集』における交友と風光の美的理念—

At the Time of Setsugetuka, I Think Most of You:

Aesthetic Philosophy of Friendship and Landscape in “*Manyōshū*”

鈴木道代

キーワード：万葉集 大伴家持 白居易 雪月花 琴詩酒

关键词：万叶集 大伴家持 白居易 雪月花 琴詩酒

要旨

白居易の詩に「雪月花の時、最も君を懐ふ」という一句がある。この詩は、白居易が五年の間、琴詩酒を共にした殷協律と別離した後、「雪月花」の時というかつて友と過ごした楽しみを懐しむという内容である。この白居易の詩に先がけて「雪月梅花」の歌を詠んだのが、『万葉集』の歌人大伴家持であった。

白居易は、「雪月花」と「琴詩酒」とを対句で詠む。雪や月や花という風景の中で琴や詩や酒を楽しむのは、中国文人の詩の伝統であり、家持はこうした文芸に倣いながら、池主と共に中国文人の如き世界を詩歌で楽しんでいた（『万葉集』巻17・3965～3977）。このような二人の贈答の中で、交友に求められたあるべき景とは、漢詩文の伝統に則った景物を取り合わせた描写であった。その流れの中で「雪月梅花」の成立があったものと考えられる。

その上で、同じ雪月花の中で思った対象が、白居易は友、家持は恋人という相異がみられるのは、白居易が中国文人の伝統である交友の文学を目指したことによるのに対して、家持は男性同士の宴席で多く歌われる恋歌の伝統に則したからであると結論づけた。

摘要

白居易の古诗中有一句“雪月花时最忆君”。这首诗是在表现白居易和殷协律离别后的5年中“雪月花”的时候最思念的人是你的意思。并不是怀念分别的朋友，而是怀念跟朋友一起度过的愉快时刻。在白居易的“雪月花”之前，《万叶集》中诗人大伴家持便咏唱了“雪月梅花”的诗句。

白居易以“雪月花”和“琴诗酒”为对句咏。雪、月、花等的风景中享受琴、诗、酒是中国人的传统。大伴家持摹仿这传统，宛如中国的文人一样，跟池主一起咏诗欣赏景色。在这两人的赠答中，大伴家持得与朋友相交时，要相符的风景是中国古诗中的寓情于景的描写方式。因此才有了大伴家持的“雪月梅花”这样的诗句。

在一样的“雪月花”中，白居易联想到的是朋友，而大伴家持联想恋人。造成这种差异的原因是因为白居易期望的是中国文人传统的以文会友的想法。与之相比，大伴家持则是男性好友在宴会上咏唱许多恋歌的传统。

1. はじめに

寄殷協律 多叙江南舊遊 白居易

五歳優游同過日 一朝消散似浮雲 琴詩酒伴皆拋我 雪月花時最憶君
幾度聽雞歌白日 亦曾騎馬詠江裙 吳娘暮雨蕭蕭曲 自別江南更不聞

【五歳優游 同に日を過ごすとも、一朝消散して 浮雲に似たり。琴詩酒の伴皆 我を抛ち、雪月花の時最も君を憶ふ。幾度か鶏を聴き白日を歌ひ、亦曾て馬に騎り紅裙を詠ず。吳娘暮雨蕭蕭の曲、江南に別れてより更に聞かず。】⁽¹⁾

(『白氏文集』卷25)

この白居易の詩は、五年の間、琴詩酒を共にした殷協律と別離し、「雪月花」の時に最も君を思うのだという。かつて幾度も聴いた雞歌白日の曲や、馬上で詠んだ紅裙の女子のことや、吳娘の蕭蕭の曲は、別れてから一度も聴いたことがないのである。この詩は別離した友を懐かしく思う詩であり、友と過ごした時の楽しみが詠まれている。ここに注目されるのは、友と「琴詩酒」を楽しんだこと、その楽しみは「雪月花」の時であったということである。

友と良辰美景の元で琴詩酒を楽しむのが中国文人の詩の伝統であるが⁽²⁾、その伝統の中に白居易の詩がある。実際に白居易は自らを「醉吟先生」と称し、自伝として記した「醉吟先生傳」では、「每良辰美景、或雪朝月夕、好事者相過、必為之先拂酒壘、次開詩篋」と述べ、雪の朝や名月の晩などの美しい季節の時に友人がやってくると酒をのみながら詩宴を行ったという。

この白居易の「雪月花」について、中西進氏は、『万葉集』の大伴家持の雪月花の歌を指摘している。

(1) 『白氏文集』の本文は『白香山詩集』(中華書局)、書き下しは新釈漢文大系『白氏文集』(明治書院)による。以下同じ。

(2) 『文選』卷30、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩八首五言并序」に建安の七子の世を理想として、「建安の末、余は時に鄴宮に在り。朝に遊び夕に讌し、歡愉の極を究む。天下の良辰・美景・賞心・樂事、四者は并せ難し。」と記されている。

宴席詠雪月梅花歌一首

由吉乃宇倍尔 天礼流都久欲尔 烏梅能播奈 乎理天於久良牟 波之伎故毛我
母 (卷18・4134)

右一首、十二月、大伴宿祢家持作

宴席に雪月梅花を詠める歌一首

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき子もがも

右の一首は、十二月、大伴宿禰家持の作⁽³⁾

中西氏は、「雪月花は、琴詩酒を共にすべく、愛すべき自然なのだが、その時は『最も君ヲ懐フ』という、深い孤独感の中に選びとられた折々」であり、孤独の翳りと共に存在する点において、家持が女人を願望するのは必然であるという。さらに雪月花が遊びであるのは、「雪月花の遊びが人間の狂おしさのゆえに成立している」からであると、家持と白居易の共有する世界を指摘している⁽⁴⁾。

家持歌の内容は、月が雪を照らす晩に梅の花を手折って贈るような愛しい子でもいたならばなあ、というものである。この歌は「愛しき子」への思いを詠んでいるが、題詞に「宴席」で詠んだことが記されている。つまり、この歌が男性同士の関係で詠まれているという点において、家持の雪月梅花の歌の世界が、白居易の交友の詩に通ずるものと考えられる。しかも、家持の歌が白居易の詩に先んじてあることに注目されよう。以下、この点について論じてゆきたい。

2. 琴詩酒と理想的風光

白居易の詩に、「琴詩酒の伴」とあるように、友との友情を深めるために「琴詩酒」の遊びは欠かせないものであった。白居易自身は「北窗三友」(『白氏文集』巻第59)において、

(3) 『万葉集』の引用は、中西進『万葉集 全訳注原文付』(講談社)による。以下同じ。

(4) 中西進「雪月花——美の秘奥」『雪月花 雪の匂い』中西進 日本文化をよむ四(小沢書店、1995年)。

今日北窗下	自問何所為	欣然得三友	三友者為誰
琴罷輒舉酒	酒罷輒吟詩	三友遞相引	循環無已時
一彈愜中心	一詠暢四肢	猶恐中有間	以酒彌縫之
豈獨吾拙好	古人多若斯	嗜詩有淵明	嗜琴有啟期
嗜酒有伯倫	三人皆吾師	或乏儋石儲	或穿帶索衣
弦歌復觴詠	樂道知所歸	三師去已遠	高風不可追
三友游甚熱	無日不相隨	左擲白玉卮	右拂黃金徽
興酣不疊紙	走筆操狂詞	誰能持此詞	為我謝親知
縱未以為是	豈以我為非		

【今日北窗の下、自ら問ふ何の為す所ぞと。欣然として三友を得たり、三友とは誰とか為す。琴罷んで輒ち酒を挙げ、酒罷んでは輒ち詩を吟ず。三友遞ひに相ひ引き、循環して已む時無し。一たび弾けば中心に愜ひ、一たび詠ずれば四肢を暢ぶ。猶ほ中に間有るを恐れ、酒を以て之を彌縫す。豈に獨り吾のみ拙好ならんや、古人多くは若くの斯し。詩を嗜むに淵明有り、琴を嗜むに啟期有り。酒を嗜むに伯倫有り、三人は皆吾が師なり。或るは儋石の儲けに乏く、或るは帶索の衣を穿つ。弦歌して復た觴詠し、道を楽しんで歸る所を知らず。三師去りて已に遠く、高風追ふべからず。三友に遊ぶこと甚だ熱く、日として相ひ隨はざること無し。左に白玉の卮を擲ち、右に黄金の徽を拂ふ。興酣にして紙を疊ず、筆を走らせて狂詞を操る。誰か能く此の詞を持して、我が為に親知に謝する。縱ひ以て是と為さざるも、豈に我を以て非と為さむや。】

と詠む。詩を愛する陶淵明、琴を愛する嵇啟期、酒を愛する竹林の七賢の劉伶など老莊的生き方を理想した三人を師として、自らもそのような生き方を志向するのである。この詩でいうところの「琴詩酒」とは、争いや政治などの世俗に背を向けた、自由気ままな老莊的生き方を意味する。これが交友の具となると、時も身分差も超える、竹林の七賢のごとき真の友情が求められたのである。

こうした「琴詩酒」による友情は、当該歌以前に、家持と池主との間で見ることができる。二人の間では、交友の具を「琴罇」という詩語で表す。「琴罇」の語は、六朝の謝朓に「寂寞此閒帷。琴尊任所對。」(「冬緒羈懷示蕭諮議虞田曹劉江二

常侍詩」⁽⁵⁾「無歎阻琴尊。相從伊水側。」(「和宋記室省中詩」⁽⁶⁾)があり、初唐の陳子昂に「既聞朝廷之樂 復此琴樽之事。」(「喜遇冀侍御珪崔司議泰之二使并序」⁽⁷⁾)、「默語誰能識 琴樽寄北窗」(「群公集畢氏林亭」⁽⁸⁾)などがある。この詩語は、古代日本の漢詩世界に受け入れられたと見られ、『懷風藻』にも次のように見ることができる。

- ・君王敬愛の冲衿を以て、広く琴樽の賞を闢く。(詩番52、山田史三方「五言。秋日於長王宅宴新羅客一首。并序。」)
- ・一面金蘭の席、三秋風月の時。琴樽幽賞に叶い、文華離思を叙す。(詩番62、調忌寸古麻呂「五言。初秋於長王宅宴新羅客。」)
- ・琴樽の興未だ已まず、誰か載す習池の車。(詩番75、百濟公和麻呂「五言。初春於左僕射長王宅讌。」)
- ・琴樽此の処に宜しく、賓客相追う有り。(詩番84、大津連首「五言。春日於左僕射長王宅宴。」)
- ・岐路衿を分かつこと易く、琴樽膝を促すこと難し。(詩番86、藤原朝臣総前「五言。秋日於長王宅宴新羅客。」)
- ・池台に我を慰むる賓、琴樽を左右にす。(詩番88、藤原朝臣宇合「五言。暮春曲宴南池。并序。」)
- ・琴樽何れの日にか断たん、酔裏眠るを忘れず。(詩番88、藤原朝臣宇合「五言。暮春曲宴南池。并序。」)
- ・清夜琴樽罷み、傾門車馬疎んず。(詩番95、藤原朝臣万里「五言。過神納言墟。」)
- ・琴樽猶未だ極まらず、明月河浜を照らす。(詩番98、藤原朝臣万里「五言。遊吉野川。」)⁽⁹⁾

これらは交友を示す語として用いられているが、ただ『懷風藻』において、「琴詩酒」の語は見ることができない。これは、詩語「琴詩酒」が中唐の白居易まで待

(5) 『先秦漢魏晉南北朝詩』齊詩卷3(中華書局)による。

(6) 『先秦漢魏晉南北朝詩』齊詩卷4(中華書局)による。

(7) 『全唐詩』卷84(中華書局)による。

(8) 注7に同じ。

(9) 辰巳正明『懷風藻全注釈』(笠間書院、2012年)。

たなければならなかったからである。しかし、これにとって代わる「琴罇(樽)」は六朝期から初唐期において生成され、『懐風藻』に受け入れられたと考えられる。加えて、「琴罇(樽)」が見られる詩の多くは、長屋王の作宝楼において執り行われた新羅の客人との送別の宴の際の詩である。そのことから、「琴罇(樽)」の語は、国際交流の詩宴における詩語として用いられており、そこに琴と酒(樽)と詩とが揃うことになる。つまり古代日本の詩歌において、すでに琴・詩・酒を用いた交友の遊びが成立していたのである。

このような交友の具である「琴罇」は、『万葉集』に載る家持と池主との交友にも見ることができる。

A 掾大伴宿禰池主に贈れる悲しびの歌二首

忽ちに枉疾に沈み、旬を累ねて痛み苦しむ。百神を禱み待みて、且消損を得たり。しかも由ほ身体疼み羸れ、筋力怯軟にして、いまだ展謝に堪へず。係恋弥深し。方今、春朝には春花、馥を春苑に流へ、春暮には春鶯、声を春林に囀る。この節候に对ひて琴罇翫ぶべし。興に乗る感あれども、杖を策く勞に耐へず。独り帷幄の裏に臥して、聊かに寸分の歌を作り、軽く机下に奉り、玉頤を解かむことを犯す。その詞に曰はく、

春の花今は盛りににはほふらむ折りて挿頭さむ手力もがも(巻17・3965)

鶯の鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折り挿頭さむ(同・3966)

二月二十九日、大伴宿禰家持

B 忽ちに芳音を辱くし、翰苑は雲を凌ぐ。兼ねて倭詩を垂れ、詞林錦を舒ぶ。以ちて吟じ以ちて詠じ、能く恋緒を觸く。春は楽しむべし。暮春の風景は最も怜れぶべし。紅桃は灼灼にして、戯蝶花を廻りて舞ひ、翠柳は依依にして、嬌鶯葉に隠りて歌ふ。楽しむべきかも。淡交に席を促け、意を得て言を忘る。楽しきかも、美しきかも。幽襟賞づるに足れり。豈慮らめや、蘭蕙藂を隔て、琴罇用る無く、空しく令節を過して、物色人を軽みせむとは。怨むる所此に有り、黙已をる能はず。俗の語に云はく、「藤を以ちて錦に続く」といへり。聊かに談笑に擬ふるのみ。

山峽に咲ける桜をただひと目君に見せてば何をか思はむ(同・3967)

鶯の来鳴く山吹うたがたも君が手触れず花散らめやも(同・3968)

沽洗二日、掾大伴宿禰池主

C 七言、晩春の遊覧一首并せて序

上巳の名辰は、暮春の麗景、桃花臉を照らして紅を分ち、柳色苔を含みて緑を競ふ。時に、手を携へて曠かに江河の畔を望み、酒を訪ひて適かに野客の家を過ぐ。既にして、琴籥性を得、蘭契光を和ぐ。嗟乎、今日恨むるは徳星已に少きことか。若し寂を扣き章を含まずは、何を以ちてか逍遙の趣を攄べむ。忽ちに短筆に課せ、聊かに四韻を勸すとふしか云、

余春の媚日は怜賞れぶに宜く 上巳の風光は覽遊するに足る
 柳陌は江に臨みて袂服を縛にし 桃源は海に通ひて仙舟を泛かぶ
 雲疊に桂を酌みて三清を湛へ 羽爵は人を催して九曲に流る
 縦酔に心を陶して彼我を忘れ 酩酊し淹留せぬはなし

三月四日、大伴宿禰池主

A～Cは、越中(富山県)に国守として赴任した家持が病に臥したときの、池主との贈答歌群である。Aは池主宛の書簡にみられ、病気のために苦しんでいることや、春の良い季節となったのに「琴籥」をもって遊ぶことが叶わないことを嘆く内容である。家持は、その春の美しい風光を「春朝には春花、馥を春苑に流へ、春暮には春鶯、声を春林に囀る」と述べ、そのような風光の中に交友のあるべき姿を求めるのである。BはAの家持に応えた池主の書簡で、家持から贈られてきた手紙と歌とで心を慰め、春の良い季節には楽しむべきであるのに、共に過ごすことができないことを怨むのだという。このことを池主は「春は楽しむべし。暮春の風景は最も怜れぶべし。紅桃は灼灼にして、戯蝶花を廻りて舞ひ、翠柳は依依にして、嬌鶯葉に隠りて歌ふ。」という。池主は家持の心を推し量り、美しい風光の中での交友を求めたのである。Cは、さらに池主の書簡で、私は春の美しい風景を楽しんだが、あなたがいらないことを怨むのであり、文章を綴らずしてどうして今日の遊覧の心を述べることができようかといひ、その思いを漢詩に託して贈るのである。ここでは「上巳の名辰」の風光の表現として、「暮春の麗景、桃花臉を照らして紅を分ち、柳色苔を含みて緑を競ふ」という暮春の風景を描き、家持の嘆きを慰めようとしている。二人の贈答は、ABCにおいて琴籥(琴と酒)の遊びに思いを寄せ、そこに詩を加えて暮春の風景の中での二人の交

遊の姿を思い描いているのである。

このように、二人のあるべき交友が琴・詩・酒にあるが、さらにその交友を飾るのが暮春の風光であることに注目される。その風光は漢詩句による詩的な風物を羅列して描いているところに特徴がある。Aの描写は、春朝、春花、春苑、春暮、春鶯、春林など、春を重ねた表現で成立している。この表現について辰巳正明氏は、「『春』を語頭に置くという積極的な漢文学への接近」であり、「季節のもっとも美しい風景に視点を向けて、その風景を表現する力がこのように形成されている」⁽¹⁰⁾という。そのような家持の表現の意図を受けて、池主もBで「紅桃灼灼」「翠柳依依」という詩句を用いる。「紅桃灼灼」の語は『詩経』『桃夭』に「桃之夭夭、灼灼其華」⁽¹¹⁾とあるのによるものであり、「翠柳依依」は『文選』（巻20）潘安仁「金谷集作詩」に「青柳何依依」⁽¹²⁾とあり、いずれも由緒正しい漢籍を典拠としている。このような紅桃と青柳との取り合わせは、『文心雕龍』『物色』に、「故に灼灼は桃花の鮮かなるを状べ、依依は楊柳の貌を尽くし」⁽¹³⁾というように、短い詩語で季節の美しい風物を表現する工夫を詩学上から説いたものである。Cは、Bと同様に美しい桃花と柳色との風光を描き、そのような中で友として手を取りあって琴罽の遊びを楽しむべきことを思い、それを七言詩に託すのである。

これら家持と池主との贈答から見ると、交友を深めるには「琴罽」の遊びが必須の具であるが、その遊びに求められたのが春の良い季節（良辰）と春の美しい風景（美景）であり、それを共に賞でることであった。このような交友と美しい風景とは、先に挙げた謝靈運の良辰・美景のことであり、それを賞で（賞心）、その上で詩を詠むこと（楽事）が交友の方法であることを家持も池主も理解しているのである。

3. 『万葉集』の雪と月と花の形成

次に、このような季節の風物の取り合わせがいかに成立したかについて検討する。家持の「雪月梅花」に見える季節の風物の取り合わせという表現の方法は、

(10) 辰巳正明「万葉集の文芸論」『万葉集と中国文学 第二』（笠間書院、1993年）。

(11) 『詩経』の本文は阮元校勘『十三経注疏』（中華書局）による。

(12) 『文選』の本文は、『文選』（中華書局）による。

(13) 『文心雕龍』の本文は、『文心雕龍義證』（上海古籍出版社）に、書き下し文は、新釈漢文大系『文心雕龍』（明治書院）による。

すでに『懐風藻』に釈智蔵「翫花鶯」（詩番8）や葛野王「春日翫鶯梅」（詩番10）の詩があるように、漢詩の素材として少なくとも持統朝には取り入れられていた。辰巳正明氏は、そのような季節の風物の取り合わせが和歌において文雅として成立したのが梅花の宴（『万葉集』巻5）であったと指摘しており、「ことに六朝から初唐の詩を学んだもの」であるという⁽¹⁴⁾。たしかに梅花の宴の歌には、梅に鶯、梅に雪、梅に青柳などの取り合わせがみられる。季節歌に定型的に見られるこれらの風物を取り合わせた倭歌の先駆けは梅花の歌にあり、それ以降の歌人たちに継承されたことが確かめられる。以下、その景物の取り合わせをみておきたい。

I 花と雪

○梅花の宴

①わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも
(巻5・822／大伴旅人)

②梅の花散らくは何処しかすがにこの城の山に雪は降りつつ
(同・823／伴百代)

③春の野に霧り立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る (同・839／村彼方)

○巻8・10の季節歌

④含めりと言ひし梅が枝今朝降りし沫雪にあひて咲きにけむかも
(巻8・1436、春雑歌／大伴村上)

⑤風交り雪は降るとも実にならぬ吾家の梅を花に散らすな
(同・1445、春雑歌／大伴坂上郎女)

⑥わが岳に盛りに咲ける梅の花残れる雪をまがへつるかも
(同・1640、冬雑歌／大伴旅人)

⑦沫雪に降らえて咲ける梅の花君がり遣らばよそへてむかも
(同・1641、冬雑歌／角広弁)

⑧梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の翼白妙に沫雪そ降る (巻10・1840、春雑歌)

⑨雪見ればいまだ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散りつつ
(同・1862、春雑歌)

(14) 辰巳正明「落梅の篇—楽府『梅花落』と大宰府梅花の宴」（『万葉集と中国文学』笠間書院、1987年）。

○大伴家持

- ⑩鶯の鳴きし垣内にはほへりし梅この雪に移ろふらむか (巻19・4287)

II 月と花

○巻8・10季節歌

- ⑪闇夜ならば宜も来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまさじとや
(巻8・1452、春相聞、紀女郎)

- ⑫春日なる三笠の山に月も出でぬかも 佐紀山に咲ける桜の花の見ゆべく
(巻10・1887、春雑歌)

- ⑬萩の花咲きのををりを見よとかも月夜の清き恋益らくに(同・2228、秋雑歌)

- ⑭誰が園の梅の花そもひさかたの清き月夜に幾許散り来る(同・2325、冬雑歌)

○大伴家持

- ⑮十五夜降り清き月夜に吾妹子に見せむと思ひし屋前の橘 (巻8・1508)

- ⑯秋風の吹き扱き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも (巻20・4453)

『万葉集』において雪・月・花の3つが揃う歌は当該歌のみであるが、花と雪、花と月を詠む歌はそれぞれI、IIのように見ることができる。まずIの花と雪のとり合わせについては、①から③が梅花の宴の際の歌である。梅花の宴とは、天平2(730)年正月13日に、家持の父である大宰帥大伴旅人邸で行われた宴のことで、大宰府(現在福岡県太宰府市)管内32人の役人たちが参加し、中国の樂府詩である「落梅の篇」に倣って、和歌で新しい風雅の文芸を作り挙げた。①は旅人の歌で、吾が園に散る梅の花を天から流れ来る雪に見立てた歌で、基本的に②③の歌も、白梅が散る様子を雪に見立てた内容である。④から⑨は巻8、10の季節分類歌に載る歌である。④から⑦は作者名が明らかであり、④はつぼみだった梅の花が、今朝降った沫雪と白さを競って花を咲かせたのだろうという歌で、白梅の開花を喜ぶ内容である。⑤は風交じりの雪が降ろうとも、まだ実がならない梅の花を散らしてくれるなといい、梅の花に若い女性が寓喩されていると思われる。⑥は岳に満開になった梅の花を雪に見まがえる風景を詠み、⑦は沫雪が降る中で咲いた梅の花をあなたに贈ったならば私のことを思い出してくれるだろうかという歌で、梅の花に恋心を託した内容である。次の⑧⑨は巻10に載る未詳歌であり、⑧は梅にとまる鶯の羽に沫雪が積もるという内容で、梅、鶯、雪の取り

合わせが詠まれている。⑨は遠くの雪を見るとまだ冬であるが、しかしもうこちらは春霞が立ち、梅の花が散り始めているというのであり、冬から春への季節が移ろってゆく季節の風景を詠む。また家持自身も⑩において、今咲き誇っている梅の花がこの大雪で散ってしまっているだろうかと、鶯、梅、雪を詠み込んでいます。ここに挙げた花と雪の取り合わせの歌は、花が梅花に限定されているところに特徴がある。その理由としては、花と雪の取り合わせが梅花の宴によって獲得され、以降の和歌における季節の風雅を表現する文雅として定着していったことが考えられる。

次にBの月と花の取り合わせの歌を見てみると、⑪から⑭は巻8、10の季節歌である。⑪は家持と同時代の紀女郎の歌で、ここでは闇夜ならばあなたが来ないのももっともでしょうが、梅が咲いている月夜に来ないなんてことはありませんよねという歌で、梅花と月夜的美しさを口実として、男の訪れを誘う内容である。⑫は月の光によって、たとえ夜であっても桜の花が見たいということを詠む。⑬は萩の花が枝のたわむほどに咲いている様子を見よとばかりに月が清らかに輝いているといい、その花を見るといっそう萩の花を思う心が募ってくるという恋の情を詠む歌である。家持自身も⑮で、清らかな月が照る夜の橘の花を吾妹子に見せたいといい、⑯では秋風によって散ってゆく花の庭の月夜を見ても見飽きないと詠んでいる。

このように花と雪、花と月の取り合わせの歌は、基本的に美的風景に思いを寄せ、また季節の景に恋心を託す歌であり、『万葉集』においては、季節の風景への思慕と恋が結び付いて、季節感を自由に表現してゆく傾向が見られる。この先駆けが中国文学を取り入れた梅花の宴であり、こうした天平期の中国文化の興隆の中で、倭歌が形成されてゆく延長線上に、家持の雪月花の歌が形成されたと考えられるのである。

4. 中国詩の雪と月と花の形成

次に漢詩に見える雪、月、花の取り合わせについて見てゆきたい。雪・月・花を詠みこむ詩は漢、魏代には見ることができず、六朝期以降に現れた素材の組み合わせである。

ア 和徐主簿望月詩 庾肩吾(梁)

樓上徘徊月 窗中愁思人 照雪光偏冷 臨花色轉春
星流時入暈 桂長欲侵輪 願以重光曲 承君歌扇塵

【樓上徘徊の月、窗中愁思の人。雪を照らして光偏へに冷やかに、花に臨めば色轉た春なり。星流れて時に暈に入り、桂長じて輪を侵さんと欲す。願はくは重光の曲を以て、君が歌扇の塵を承けん。】⁽¹⁵⁾

(『藝文類聚』卷1、月)

イ 游禁苑幸臨涓亭遇雪應制 蘇頌(初唐)

平明敞帝居 霰雪下凌虛 寫月含珠綴 從風薄綺疏
年驚花絮早 春夜管絃初 已屬雲天外 欣承霈澤餘

【平明として帝居敞く、霰雪下りて虚を凌ぐ。月を寫して珠綴を含み、風に從ひて綺疏を薄くす。年驚して花絮早く、春夜管絃を初む。已に雲天の外を屬て、欣びて霈澤の餘を承く。】

(『全唐詩』卷58)

ウ 送費六還蜀 駱賓王(初唐)

星樓望蜀道 月峽指吳門 萬行流別淚 九折切驚魂
雪影含花落 雲陰帶葉昏 還愁三徑晚 獨對一清尊

【星樓蜀道を望み、月峽吳門を指す。萬行別涙を流し、九折驚魂に切まる。雪影は花落を含み、雲陰は葉昏を帯ぶ。還りて三徑の晩を愁へ、獨り一清の尊に對す。】

(『全唐詩』卷78)

アは梁庾肩吾の詩であり、徐の主簿が「望月」の詩を詠んだ時にそれに和した詩である。ここでは楼の上を渡る月が雪を照らし、花が春の様子を告げているという内容で、雪、月、花が詠み込まれている。「歌扇」とは、歌伎が持つ扇のことであることから、この詩が宴席のものであり、そこに集う仲間との遊びを歌ったものと思われる。イは初唐蘇頌の詩で、天子の離宮である涓亭への行幸の際に天子の命によって作詩したことが題詞に記されている。この詩の内容は、天子の御殿は大変素晴らしく、みぞれ雪が降る様子は、別荘のすばらしさを圧倒するほど

(15) 歐陽詢編『藝文類聚』(上海古籍出版社)による。

『万葉集』(岩波文庫)は、家持の当該歌の典拠として、この詩を指摘している。

であるといい、また庭は美しい月が白玉のように輝き、そこに吹く風のすばらしさは窓の棧に掘った花の彫り物を凌ぐほどであるという。そして白い花が舞い散る季節が早いことに驚き、そのような春の宵に管弦の宴を始めるのだと詠む。このような白い雪、月、花が揃う風景の中で、私たちは天子の徳によって潤された太平の水辺に座することができるのだと歌っている。うは初唐駱賓王の詩で、費六が蜀に還るのを送った時の別離の詩である。ここでは、星がかがやく樓閣は蜀への道を望み、月が輝く山谷は呉の門を指しているといい、その帰途の長い道のを思うと別離の涙が流れ、つづら折りの道のを思うと驚嘆の思いが迫るといふ。そのような別離の風景として、雪が輝く中に、花が舞い散り、空を覆う雲の影の中に、葉は揺れている風景が描かれている。また「三徑」とは、漢の蔣詡が庭に三つの小道を造り、松、菊、竹を植えたという故事から、塵外の住まいを表し、あなたが還ってしまった後では、そのような三徑で楽しんだ夜を憂い、今夜は独りで一杯の酒を飲むのだという。ここで描かれる雪、月、花は友との別れの時の風景であり、共に賞でるべき美しい風景であるのに、今は独りで酒を飲むしかない孤独の悲しみの心を詠んでいるのである。このように、六朝から初唐にかけて見える、雪、月、花の景物を詠み込む詩は、「雪月花」という熟語としてではなくそれぞれの風物を取り混ぜながら、宴席、交友などの場で風流な景として取り入れてゆくことが確認される。

5. 白居易の「雪月花」の成立

このように漢詩において「雪月花」の熟語は、中唐の白居易の時代まで待たなくてはならなかったのであるが、白居易自身においても、「雪月花」を詩語として用いるまでの過程があったものと思われる。白居易の詩において「寄殷協律」を作詩する以前の、雪、月、花を取り合わせた詩は次のように見える。

- ・ 獨出門前望野田 月明蕎麥花如雪（「村夜」巻14）
- ・ 蕊坼金英菊 花飄雪片蘆 波紅日斜沒 沙白月平鋪（「東南行一百韻寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十二補闕杜十四拾遺李二十助教員外竇七校書」巻16）
- ・ 不獨君嗟我亦嗟 西風北雪殺南花 不知月夜魂歸處 鸚鵡洲頭第幾家（姫、

鄂人也。)(「和劉郎中傷鄂姬」卷13)

加えて、交友の詩においても雪、月、花の取り合わせが多数見られる。

エ 贈元稹(『白氏文集』卷第1)

自我從宦游 七年在長安 所得惟元君 乃知定交難
豈無山上苗 徑寸無歲寒 豈無要津水 咫尺有波瀾
之子異於是 久處誓不諼 無波古井水 有節秋竹竿
一為同心友 三及芳歲闌 花下鞍馬遊 雪中杯酒歡
衡門相逢迎 不具帶與冠 春風日高睡 秋月夜深看
不為同登科 不為同署官 所合在方寸 心源無異端

【私の宦游に従ひてより、七年長安に在り。得る所は惟だ元君のみ、乃ち知る交を定するの難きを。豈に山上の苗無からんや、徑寸歳寒無し。豈に要津の水無からんや、咫尺波瀾有り。之の子是に異なり、久しく處りて誓ひ諼れず。波無し古井の水、節有り秋竹の竿。一たび同心の友と爲り、三たび芳歳の闌に及ぶ。花下鞍馬の游、雪中杯酒の歡。衡門相ひ逢迎し、帶と冠とを具へず。春風日高くして睡り、秋月夜深くして看る。登科を同じくするが爲ならず、署官を同じくするが爲ならず。合ふ所は方寸に在り、心源異端無し。】

オ 嚴十八郎在郡日改制東南樓因名清輝未立標榜徵歸郎署予既到郡性愛樓居宴遊其間頗有幽致聊成十韻兼戲寄嚴(『白氏文集』卷第8)

嚴郎制茲樓 立名曰清輝 未及署花榜 遽徵還粉闌
去來三四年 塵土登者稀 今春新太守 灑掃施簾幃
院柳煙裏娜 簷花雪霏微 看山倚前戶 待月闌東扉
碧窗戛瑤瑟 朱闌飄舞衣 燒香卷幕坐 風燕雙雙飛
君作不得住 我來幸因依 始知天地間 靈境有所歸

【嚴郎茲の樓を制し、名を立てて清輝と曰ふ。未だ花榜を署するに及ばず、遽かに徵されて粉闌に還る。去りてより來三四年、塵土登る者稀なり。今春新太守、灑掃して簾幃を施す。院柳煙裏娜たり、簷花雪霏微たり。山を看て前戸に倚り、月を待ちて東扉を闌く。碧窗瑤瑟を戛し、朱

闌舞衣を飄す。香を焼き幕を巻いて坐すれば、風燕雙雙飛ぶ。君作れども住することを得ず、我來りて幸ひに因依す。始めて知る天地の間、靈境歸する所有るを。】

カ 答馬侍御見贈 (『白氏文集』卷第14)

謬入金門侍玉除 煩君問我意何如 蟠木詎堪明主用 籠禽徒與故人疏
苑花似雪同隨輦 宮月如眉伴直廬 淺薄求賢思自代 嵇康莫寄絕交書

【謬つて金門に入りて玉除に待す、君は煩がして我に問ふ意何如と。蟠木詎ぞ明主の用に堪へんや。籠禽徒に故人と疏なり。苑花雪に似て同じく輦に随ひ、宮月眉の如く直廬に伴ふ。淺薄賢を求めて自ら代へんことを思ふ、嵇康絶交の書を莫すること莫れ。】

エは、科挙の試験に合格した時の同期である元稹との友情を詠んだ詩であり、花の下で馬に乗って遊んだり、雪の中で盃を酌み交わしたりしたことや、秋の月が出るときには夜が更けるまで眺めたことを詠む。オは、嚴十八が杭州刺史であった時に樓を建て直したが、途中で都に召還されてしまったために、白居易が嚴十八(休復)の不在の中でこの樓で宴を行った時の詩である。ここでは軒先の花がまるで雪のようにはらはらと散り、東の扉を開いて月の出を待ったりしたと詠まれる。白居易の心情は直接的には述べられていないが、不在である嚴十八を思つての作であるといえよう。カは、馬侍御から贈られた詩に答えた詩である。ここでは自分自身が金馬門(翰林院)に出仕することになり、疎遠になってしまったが、かつて雪のように白い花の下で天子に仕え、宮月の下で一緒に宿直したことを述べ、竹林の七賢の嵇康のように、私に絶交書を突きつけなくてくれと懇願する内容である。

これらの漢詩のように、雪、月、花の語が極めて接近しながらも、個々に景物が取り入れられているのであり、六朝から初唐期へと雪、月、花の取り合わせの方法が引き継がれていったのである。白居易においても交友を深める最も美しい風景として取り入れながら、洗練されて熟語化した結果、「雪月花」の詩語を獲得したと考えられるのである。このような成立の過程については、家持の「雪月梅花」もおおよそ、同様の軌跡を辿ったものと思われる。倭歌の景物の合わせは、天平期の梅花の宴を始発としながら、池主との交友の文学を経て、交友における

あるべき景として「雪月梅花」の語を獲得したものと考えられるのである。

6. おわりに

以上のように、「雪月花」の詩語が形成されてゆく中で、家持の「雪月梅花」の歌が西暦750年の作品であり、白居易の詩が西暦820年代の作品である⁽¹⁶⁾ことを考えると、家持の歌が白居易よりも70年以上も早く詠まれたことは驚くべきことである。漢詩世界において、「雪月花」という文芸的な詩語の獲得は、中唐の白居易まで待たなくてはならなかった。

その白居易は、「雪月花」と「琴詩酒」とを対句で詠む。雪や月や花という風景の中で琴や詩や酒を楽しむのは、中国文人の詩の伝統であり、家持も「雪月梅花」の歌以前に、池主とこうした文芸に倣いながら、共に中国文人の如き世界を詩歌で楽しんでいた。このような二人の贈答の中で、交友に求められたあるべき景とは、漢詩文の伝統に則りながら景物の取り合わせの描写であった。その結果として家持の「雪月梅花」の成立があったものと考えられる。

その上で考えなければならないのは、白居易の「君を憶ふ」に対して、家持は「愛しき子もがも」と詠んだことの違いである。同じ雪月花の中で思われるのは、一方は「君」(友)であり一方は「愛しき子」(恋人)である。この相異は小さくはない。白居易の「君を憶ふ」には、明らかに中国文人の伝統である交友という態度があろう。その伝統的な文人の態度には、女子への思いが入る余地はない。それに対する家持は、男性同士の宴席で多く歌われる恋歌の伝統に根ざすように思われる。池主との中国文人的な交友のあり方を理解しながらも、家持の態度が「愛しき子もがも」へと向かったのは、倭の歌の伝統から考えるならば必然的なことであったと思われる。

(16) 白居易は822年、51歳の時に杭州刺史に任ぜられた。この詩は55歳に任を解かれた後の作である。